

# 出生前診断と向き合う

十分な知識や情報がないまま中絶することがないよう、これから導入する新しい出生前診断は、

遺伝カウンスリングの態勢が整った施設で限定的に実施すべきだ。日本産科婦人科学会は、妊婦の血液検査でダウン症など3種類の胎児の染色体異常の可能性が分かる新型診断の指針案で、そうした考えを打ち出している。

## 遺伝カウンスリング



広島大病院遺伝子診療部の外来。兵頭医師は「出生前診断の前にカウンスリングが必要」と語る

## 診断と情報不安を緩和

カウンスリングに応じるのは臨床遺伝専門医の

兵頭麻希医師(44)と看護師2人。出生前診断を希望する人に対して、検査前に1時間以上かけて、カウンスリングをする。検査を受ける理由や何が不安かなど、じっくり検査の結果、胎児に障害や病気があることが分かるわけではないことも伝える。

うかも含め、必要なだけカウンスリングに応じるときに、混乱するケースが少なくないからだ。保険外診療で、同病院の1時間までのカウンスリングの費用は、初診時5565円、再診時3749円となっている。兵頭医師は10年に及ぶカウンスリングの経験を振り返り「お母さんたちを過剰に不安にさせないことが大切。それには、正確な診断と情報が必須」と強調する。「カウンスリングによって、最終的な選択は変わっていく。その人に必要のない検査や中絶を減らせる実感している」と語る。

### ■態勢は不十分

一方、遺伝カウンスリングの態勢は十分とは言

## 検査前からの活用大切

■年間200件対応  
広島市南区の広島大病院遺伝子診療部。観葉植物が置かれた優しい雰囲気の外來がある。出生前診断も含め、妊娠や出産に関する遺伝カウンスリングを年間約200件受けている。

耳を傾ける。遺伝学的な診断をするため、家族構成や妊娠歴、流産の経験の有無なども尋ねる。検査について、どんな種類の

い難い。中国地方では、知識を備えた臨床遺伝専門医は75人いるが、産婦人科や小児科に所属する専門医は半数程度。認定遺伝カウンスラーは6人ととどまる。カウンスリング態勢が整わないまま、検査が実施されている例も多いとみられる。現場の専門家たちは、出生前診断がどんなものか、妊婦が知らないまま、「安心のため」念のため」と安易に受けること

### 新しい出生前診断について 日本産科婦人科学会が示した指針案骨子

- 十分な遺伝カウンスリングができる施設で、限定的に実施すべきだ
- 検査を実施する施設は専門外來を備え、産婦人科専門医と小児科専門医(どちらかが臨床遺伝専門医)の在籍が必要
- 対象となる妊婦は、35歳以上▽染色体異常の子どもを妊娠したことがある▽超音波検査や母体血清マーカー検査で染色体異常の可能性を示された一などに限る
- 医師や検査会社は新たな検査を妊婦に積極的に知らせたり、安易に勧めるべきではない
- 検査の実施施設を認定・登録する第三者機構をつくるのが望ましい

クリック  
新型出生前診断の臨床研究の参加を計画する施設 国立成育医療研究センターによると、新しい出生前診断の臨床研究の参加の条件を満たしている施設は、同センターや昭和大、大阪大など7施設

設。ほかに全国の十数施設が検討中という。中国地方では、広島大病院が臨床研究への参加を検討している。日本産科婦人科学会は、臨床研究の開始時期を、3月に指針が正式決定した後、に求めるよう求めている。

全国遺伝子医療部門連絡会議のホームページ (<http://www.iden-shiiryoubumon.org/list/index.html>) で、会員施設の連絡先を紹介している。

(平井敦子)